

## はじめに

本書は、「日東駒専」⇨日本大学・東洋大学・駒澤大学・専修大学、及び「産近甲龍」⇨京都産業大学・近畿大学・甲南大学・龍谷大学を目指す受験生を対象とした古文の受験対策問題集です。

### ■編集の趣旨

志望する大学の個別学科・学部の過去問題に取り組む前に、各大学の入試問題の特色や傾向を体感することを希図して編集しました。もちろん入試本番を意識し、詳細な解説を付した問題演習となっています。

### ■特色と利用法

1 〈日東駒専&産近甲龍〉八大学の最近の入試問題の中から、各大学の入試レベルや傾向を踏まえた典型的・特徴的と思われる問題を精選し、可能な限り入試そのままの形で掲載しました。

2 各大学の問題の冒頭には【出題分析】【対策】として、その大学の入試問題のレベルや特徴と留意点、並びに対策を簡潔に示し、受験勉強の指針となるよう配

慮しました。

3 ★印により難易度を三段階で表示し、特に難度の高い設問には $\text{\textcircled{★}}$ と示しました。

★ 易（標準より易しい）

★★ 標準（日東駒専&産近甲龍の標準レベル）

★★★ 難（標準より難しい）

4 受験時に費やせる解答時間の目安を示しました。本番を想定してできる限り時間内に解くことを心がけてください。

5 詳しく分かり易い解説を施した別冊「解答解説編」を付しました。チャートや図解などを用いたり、解法の極意をコラム形式にまとめるなど工夫を凝らしています。単なる答え合わせに終始せず、解説を熟読し、誤答の原因を突き止め、正解へと至る道筋を理解し、疑問が残らないように努めてください。

本書が志望校合格への一助となることを願っています。

日本大学	◇ 出題分析と対策				
	1 説話 古今著聞集		(文理)	8	
	2 物語 とりかへばや物語		(文理)	11	
	3 物語 平家物語		(経済)	14	
東洋大学	◇ 出題分析と対策				
	4 説話 十訓抄		(文・経営 他)	20	
	5 物語 源氏物語		(文・経営 他)	25	
駒澤大学	◇ 出題分析と対策				
	6 物語 あきぎり		(仏教・文 他)	30	
	7 物語 栄花物語		(仏教・文 他)	34	
専修大学	◇ 出題分析と対策				
	8 紀行 奥の細道		(経済・法 他)	40	
	9 物語 平家物語		(全)	44	
京都産業大学	◇ 出題分析と対策				
	10 日記 更級日記		(文系)	50	
	11 日記 和泉式部日記		(文系)	54	
	12 詩歌 成尋阿闍梨母集		(文系)	58	
近畿大学	◇ 出題分析と対策				
	13 歌論 俊頼隨腦		(法・経済 他)	64	
	14 物語 転寝草紙		(法・農 他)	68	
甲南大学	◇ 出題分析と対策				
	15 物語 大和物語		(文系)	74	
	16 随筆 雲萍雜志		(文系)	77	
龍谷大学	◇ 出題分析と対策				
	17 物語 大和物語		(文・経済 他)	84	
	18 紀行 都のつと		(文・経済 他)	88	
	19 物語 堤中納言物語		(文・経済 他)	92	

# 日本大学

## 出題分析

### 【出題形式】

法学部・経済学部A方式：現代文二題、古文一題の合計三題で、法学部はマークシート式と記述式の併用、経済学部は全問マークシート式。商学部A方式・芸術学部：現代文二題、古文一題、国語常識一題の合計四題で、全問マークシート式。法学部・経済学部：商学部のN方式：現代文二題、古文一題の合計三題で、全問マークシート式。文学部（人文系）：現代文二題、古文二題、漢文一題の合計四題で、全問マークシート式。文学部（社会系）：現代文二題、選択問題（現代文・古文・漢文から一題）の合計三題で、全問マークシート式。この他の学部でも、必須問題や選択問題として古文が出題されている。試験時間は六〇分で、古文を解答するのにかける時間は、二〇分程度である。

### 【問題文】

中古・中世の随筆、物語、説話、日記など、有名作品からの出題が多い。文章の難易度は標準的である。

近年の出題は、『平家物語』、『とひかへばや物語』、『落窪物語』、『伊勢物語』、『大和物語』、『増鏡』、『枕草子』など。

### 【設問形式】

語意、空欄補充、人物指摘、傍線部の解釈・説明・理由、内

容真偽、文法、和歌の修辭法、古典常識、文学史などが、まねばなく出題されている。

古文の基礎知識を問うものが大半だが、本文の内容に合致するものを選択する問題では、正確で深い読解が求められる。

### 【対策】

学校の授業を大切にすることが基本である。教科書に載っている有名な古文を精読し、古語や文法、文学史に関する基礎的な知識を蓄えていこう。

文法に関しては、知りたい事項だけを、文法書や辞書で断片的に調べているだけでは、なかなか身につかない。まずは文法書を一回通して読み、文法の決まりを体系的にしつかりと理解しよう。そのうえで、活用や接続、助動詞の意味などを繰り返し暗記すると、文法の知識が定着し、応用も効くようになる。

また、古文単語は、三〇〇語前後の単語集をマスターしておく。加えて、問題演習をするたびに、そこにでてきた重要古語を書き留めて覚えるようにすると、印象にも残り有効である。

古典常識の問題の対策としては、国語使覧などの図録を利用しよう。古典文学の背景、例えば貴族や武士の住まいや装束、都の平面図、昔の年中行事、和歌に詠まれた動植物などについて、具体的なイメージをもっておくとよい。

● 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

刑部卿敦兼は、見めのよにくさげなる人なりけり。その北の方は、はなやかなる人なりけるが、五節を見待りけるに、とりどりにはなやかなる人々のあるを見るにつけても、まづわがをとこのわるさ心うくおほえけり。家に帰りて、すべて物をだにもいはず、目をも見あはせず、うちそばむきてあれば、しばしは何事のいできたるぞやと、心も得ず思ひひたるに、しだいに厭ひまさりて、かたはらいたきほどなり。さきざきの様に一所にもあらず、方をかへて住み侍りけり。或る日、刑部卿出仕して、夜に入りて帰りたりけるに、出居に火をだにもとさず、装束はぬぎたれども、たたむ人もなかりけり。女房どももみな御前のまびきにしたがひて、さしいづる人もなかりければ、せんかたなくて、車寄せの妻戸をおしあけて、独りながめ居たるに、更たけ、夜しづかにて、月の光、風の音、物ごとに身にしみわたりにて、人のうらめしさも取りそへておほえけるままに、心をすまして、筆をとりいでて、時の音にとりすまして、

A ませのうちなるしら菊も うつろふみるこそあはれなれ 我らがかよひて見し人も かくしつっこそかれにしか

と、くり返したひけるを、北の方聞きて、心はやなほりにけり。それよりことになからひめでたくなりけるとかや。優なる北の方の心なるべし。

〔古今著聞集〕

〔注〕 \* 筆策Ⅱ雅楽で使う笛の一種。

〔問1〕 傍線部①・②の文中での意味として、もつとも適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

- |  |   |
|--|---|
| <p>①</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 怒ってしまうほどであった</li> <li>2 いたたまれないほどであった</li> <li>3 笑ってしまうほどであった</li> <li>4 ばかばかしくなるほどであった</li> </ol> | <p>②</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 その頃の流行にかなった美しい音</li> <li>2 寂しい秋の夜の趣にあわせた音</li> <li>3 時を知らせる鐘のように澄んだ音</li> <li>4 今の自分の気持ちにあわせた音</li> </ol> |
|--|---|

〔問2〕 傍線部①「思ひゐたる」の主語として、もつとも適当なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 北の方
- 2 女房
- 3 敦兼
- 4 周囲の人々

〔問3〕 傍線部②「我らがかよひて見し人」と同一人物はどれか。もつとも適当なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 にくさげなる人
- 2 はなやかなる人
- 3 たたむ人
- 4 さしいづる人

〔問4〕 傍線部③の「なる」の説明として、もつとも適当なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 指定の助動詞の連体形
- 2 ラ行四段動詞の連体形
- 3 形容動詞の連体形の語尾
- 4 伝聞の助動詞の連体形

〔問5〕 Aの歌の中で使われている技法はなにか。もつとも適当なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 掛詞
- 2 枕詞
- 3 本歌取り
- 4 序詞

〔問6〕 問題文の内容と合致するものを、次の中から一つ選びなさい。

- 1 敦兼の北の方は、心がふさいで家に閉じこもっていたが、夫の筆筈にいやされた。
- 2 敦兼と北の方は、元々不仲だったが、敦兼の楽才のすばらしさで仲良くなれた。
- 3 北の方は、華やかな場に出られない敦兼に失望したが、その歌には感動した。
- 4 敦兼は容姿の醜さで北の方を失望させ嫌われたが、音楽によってまた仲直りした。

## 2

## とりかへばや物語

● 日本大学 文理

★★☆ 20分

● 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

いづれもやうやうおとなび給ふままに、若君はあさましう物恥ぢをのみし給ひて、女房などにだに、すこし御前とほきには見え給ふ事もなく、父の殿をもうとく恥づかしくのみおほして、やうやう御文習はしさるべき事もなど教へきこえ給へど、おほしもかけず、ただいと恥づかしくのみおほして、御帳のうちのみうづもれ入りつつ、絵かき、雛遊び・貝おほひなどし給ふを、殿はいとあさましきことにおほし給はせて、つねにさいなみ給へば、果ては涙をさへこぼして、あさましうつつましのみおほしつつ、ただ母上・御乳母、さらぬはむげに小さき童などにぞ見え給ふ。さらぬ女房などの御前へも参れば、御几帳にまつはれて、恥づかしいみじとのみおほしたるを、いとめづらかなる事におほし嘆くに、又姫君は今よりいとさがなくて、をさをさ内にも物し給はず、外にのみつとおはして、若き男ども童べなどと、鞠・小弓などをのみもてあそび給ふ。御出で居にも、人々参りて文作り、笛吹き、歌うたひなどするにも走り出て給ひて、もろともにも教へ聞えぬ琴笛の音も、いみじう吹きたて弾きならし給ふ。ものうち誦じ、歌うたひなどし給ふを、参り給ふ殿上人・上達部などは、めでうつくしみきこえつつ、かたへは教へたてまつりて、この御腹のをば姫君と聞こえしは、ひが事なりけりなどぞ、みな思ひあへる。殿の見あひ給へるおりこそ、とりとどめても隠し給へ、人々の参るには、殿の御装束などし給ふほど、まづ走り出で給ひて、かく馴れ遊び給へば、中々え制しきこえ給はねば、ただ若君とのみ思ひて、もて興じうつくしみ聞えあへるを、さ思はせてのみ物し給ふ。

10

5